

Rio

- ◆豊田市にもついに定着したホソオチョウ
- ◆豊田市に侵入していた外来種
「台湾タケクマバチ」
- ◆植物検疫について

豊田市矢作川研究所

〒471-0025
 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
 TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028
 e-mail yahagi@yahoo.co.jp
<http://yahagigawa.jp>



豊田市にもついに定着した ホソオチョウ

高橋匡司・間野隆裕

皆さんホソオチョウってごぞんじですか？ 写真のような綺麗なアゲハチョウ科のチョウですが、もともと日本には生息していませんでした。朝鮮半島や中国東部などに分布していたチョウで、「外来生物法」で要注意外来生物に指定されています。1978年東京で確認（人が放したと言われている）されて以来、関東地方や中部、関西、中国地方と多くの場所で生息することがわかってきました。東海地方では岐阜県大野町の揖斐川沿いで1999年に初めて報告され、その後近くの流域に広がっていきまし、恵那市での発生も確認されています。また、愛知県の名古屋市や春日井市の庄内川両岸沿いでも確認されるようになりましたが、それはいずれも人間がどこからか持ってきて放した個体が増えたものと推定されています。実はこのホソオチョウは、飛翔力が弱くあまり遠くに飛ばないといわれているのです。そのホソオチョウが現在行われている新編豊田市史の調査の一環で、今年、豊田市在住調査員の笹俣泰彦さんによって豊田市深見町と猿投町で発見されたのです。研究所との共同調査では、猿投町で4～5月上旬に発生した成虫が産卵し、そこから次の世代が5月下旬～6月にかけて多数発生していました。一見して数10個体の飛翔が確認できるほどでした。

ホソオチョウの幼虫はウマノスズクサという河川堤防などの明るい開けたところに生育する植物だけを食べます。日本にはもともと同じウマノスズクサだけを食べて生活するジャコウアゲハという種がありますが、ホソオチョウは、その在来のジャコウアゲハを駆逐して



ホソオチョウ交尾個体
2008年6月10日豊田市猿投町



ホソオチョウ卵(上に同じ)

しまうのではないかと心配されています。また本来生息することのないところで突然繁殖するのですから、他にも両種の交配など何か生態的に問題が生じるのではないかと危惧されています。

今回確認したところは、矢作川の支川である籠川や御船川流域に位置する田園地帯で、食草であるウマノズクサにはジャコウアゲハの幼虫もつき、成虫もホソオチョウと一緒に飛んでいました。このホソオチョウがいつどのような経路をたどって当地に侵入してきたかは定かではありません。発生している猿投町の周辺では、矢作川研究所が2002年に昆虫調査を実施しているものの確認されていないことから、何らかの原

因でその後に発生し始めたか、個体数が増大した可能性が高いのです。最も近隣の既存の分布地である名古屋市守山区からは直線距離で約17kmなので、そこから飛来して分布を拡大した可能性も考えられます。しかし、他のいくつかの生息地と同様、人為的に持ち込まれた可能性も非常に高いと考えられます。

揖斐川水系や庄内川流域の生息状況なども考え合わせると、ここ数年の間に発生拡大傾向が顕著であると推察されます。今後さらに注意してみていく必要があると思います。

(たかはし まさし、名古屋昆虫同好会幹事・

まの たかひろ、豊田市矢作川研究所総括研究員)

豊田市に侵入していた外来種 「タイワントケクマバチ」

川添昭夫

春先から夏にかけてはいろいろなハチが庭や野山を飛び回っています。ハチたちのシーズンで、ミツバチやスズメバチとともによく目立つのがクマバチです。いろいろな花などの周辺でよく空中静止飛行を見かけます。

ところが、豊田市に、これまでのクマバチとは違うクマバチがいることがわかってきました。台湾や中国に生息することからその名も「タイワントケクマバチ」。在来のクマバチは胸部が黄色ですがこのハチは真っ黒です。ただ雄の頭部の一部は黄色で、近くで見ると雌との違いがわかります。

このハチは、昨年日本で初めて豊田市朝日町と梅坪町で発見され、岐阜県の長良川河川敷にも生息することがわかっています。今年の発生状況を調べてみると、矢作川平戸橋下流両岸の扶桑町と平戸橋町や籠川西部の若草町・上原町、それに猿投町からも記録されました。どうやら旧豊田市ではここ数年前から生息して広がっているようです。

訪花植物としてはスイカズラ・サルビア・ニセアカシア・フジ・クロガネモチ・クチナシの報告があります。筆者が観察した2008年5月25日にはミカン・キバナコスモスに雌が訪花し、写真1のようにアカツメクサへの訪花も確認されています。

在来のクマバチは古木に穴をあけて営巣しますが、このハチは枯れたマダケに1cmほどの穴をあけて巣を造ります(写真2)。1年前に切った新しい竹を好むようです。このような竹林や竹を利用した畑などが矢作川河川敷や市内には至る所にありますから、分布

を広げているだろうことも十分納得がいきます。竹の内部を調べてみると4室があり、竹の節から上に向かって造られているようです(写真3)。各巢室に花粉団子が貯えられており、その内には長さ12mm、直径2mmの非常に大きな卵が生み付けられており、その



写真1 アカツメクサで吸蜜するタイワントケクマバチ♀
(2008年5月23日 豊田市猿投町で間野氏撮影)



写真2 営巣する竹

花粉団子を食べた幼虫はすくすくと育っていました（写真4）。仕切壁は内部の竹を削って造るようです。

豊田市は、2001-2003年に詳細な生物調査を実施し、その結果を豊田市自然環境基礎調査報告書（2005）としてまとめていますが、タイワンタケクマバチは記録されていません。その時この大きな目立つ種類が記録されなかったことから、それ以降に侵入してきた可能性が考えられます。全国でこのような発生の確認がされているのは豊田市だけです。豊田市は以前から竹文化が発達しており、近年では海外から竹が輸入されています。タイワンタケクマバチはその輸入竹に付いて侵入してきた可能性も十分考えられます。今後どのように分布を広げていくか。在来のクマバチとの関係はどうなるかなど気をつけて調べて行かなくてはなりません。

一度花に来るハチを、気をつけて観察して見て下さい。皆さんの家のそばにもいるかもしれませんよ。

（かわぞえ あきお、藤原岳自然科学館館長）

参考文献

矢田直樹（2007）愛知県と岐阜県におけるタイワンクマバチの採集記録。月刊むし439：39-40。

神尾宏司（2007）愛知県豊田市におけるタイワンタケクマバチの確認記録について。つねきばち12：21-25。



写真3 巣の内部



写真4 花粉団子を食べる幼虫

植物^{けん えき}検疫について

船橋勝幸

植物の病害虫が新たな地域に侵入すると、思いもよらない大きな被害を与えることがあります。日本からアメリカに渡り当地で大害虫となったマメコガネが、「ジャパニーズビートル」として悪名を馳せたのはその1例です。一度侵入した病害虫はその根絶が非常に難しく、侵入や定着を未然に阻止する必要があります。植物防疫所では、日本の植物に被害をもたらす海外からの病害虫の侵入を防ぐため、全国の港や空港で輸入検疫を行っているほか、特殊な病害虫の国内でのまん延を防ぐための国内検疫、諸外国の要求に応じた輸出検疫などの業務を行い、日本の農業と緑を守るために力を注いでいます。

◆輸入植物検疫

ここでは植物防疫所が行っている業務の中から、輸入植物検疫について紹介します。病害虫が付着する危険性のある植物とその病害虫の発生国により規制の内

容を定め、病害虫の侵入を防止しています。植物は「輸入禁止品」「輸入検査品」「検査不要品」の3つに区分けされています。

まず、輸入禁止品についてお話しいたします。日本に万一侵入した場合、大きな被害が予測され、かつ輸入時には的確な検査が困難な病害虫があります。このような病害虫が発生している国（地域）から、その病害虫の付着している恐れのある植物は輸入が禁止されています。ただし、輸入禁止品であっても相手国側において、発生している病害虫を完全に殺虫殺菌できる体制が整った場合には、農林水産大臣が一定の条件を付して輸入を解禁する制度があります。例えば、アメリカからはサクランボ生果実の輸入が禁止されました。これはアメリカにはサクランボ、リンゴ、モモ、クルミなどの大害虫として知られるコドリングアという日本には分布していない蛾が分布しているためです。日本の店頭でみかけるいわゆるアメリカンチェリーは、

現地で消毒を行い、梱包等の一定条件がクリアされたものです。また、生きている病害虫や土なども輸入が禁止されています。

次に輸入検査品についてです。上記の輸入禁止品に該当しない植物で、苗木、観賞用植物、切花、球根、種子、果実、野菜、豆類、木材など、ほとんどの植物類は輸入時の検査が必要となります。ただし、これらにあっても木工品や製茶など高度に加工され、病害虫の付着するおそれのないものは、輸入時の検査は不要となります。

◆輸入検査の場所と方法

諸外国からは植物類が様々な輸送形態で日本へと持ち込まれてきます。旅行者の手荷物、郵便物などから、大型の専用船に直接積まれてくることもあります。近年は低温での流通管理技術の発達により、地球の裏側からでさえもその品質を保ったままの状態でのコンテナ貨物として輸入されてきます。

輸入検査は植物が輸入された場所で、通関に先立って行われます。検査方法は全ての植物の中から必要量をサンプル抽出して、実際に目で見て検査を行います（写真1）。ただし異常などがあれば顕微鏡下等で確認します。また病害虫の付着が疑われる植物で、輸入時の検査のみでは判定が下せないような場合について

は一定期間、保管後に判定することもあります。

◆病害虫の同定

世界各国から多種多様な植物類が輸入されている昨今、それに伴って輸入植物検疫でも多岐に渡る病害虫が発見されています。冒頭に述べましたとおり植物防疫所では植物類の病害虫を対象にしていますので、発見された種が植物にとって有害なのか、それとも有害性を持たない種なのかを正確に判定する必要があります。種名を特定することをいわゆる同定といいますが、その作業の難しさは、昆虫類の多様性の高さ、すなわち種類数の多さを想像していただくと御理解いただけるかと思います。

発見される主なものは、種苗や切花からはカイガラムシ類、アブラムシ類などが、木材からはキクイムシ類やカミキリムシ類などが、野菜や果物からはヤガ科やメイガ科といった蛾類などです。特殊な例としては、タイから輸入された野菜類から発見された幼虫を飼育したところ、開張1cmにも満たないガの成虫が羽化し、調査の結果、新種であったというケースもあります（写真2）。もちろんですが、調査の結果、有害種であることが判明した場合は不合格となり、消毒等の措置をしなければ日本には持ち込めません。

（ふなはし かつゆき、農林水産省名古屋植物防疫所）



写真1 アメリカ産オレンジの輸入検査（コンテナ貨物）



写真2 タイ産野菜から発見された新種の蛾

表紙の写真：上（ミカキグサ 2008.7.22）、中（ウスグヌカギバ 2007.4.12）、下（ニホンイタチ 2007.5.豊田市千石町 吉田万佐敏氏撮影）

後記

今回は最近のトピックの中から、外来昆虫に関する特集をしました。人や物資の往来と共に、生き物もそれまで見られなかった地域に分布を拡大し、生態系に影響を与えています。農業害虫では植物検疫などによって侵入を防いでいるのですが、世界各地との物流が盛んな現代に、農業害虫を含め外来昆虫の移入を完全に防ぐのは極めて困難です。しかし少なくとも故意に分布を拡大させるような事だけは避けるべきです。（間）